

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

「障害者と生きる」

秦野市立北中学校

二年 福本 雅治

私の父さんは障害者です。三年前に倒れて高次脳機能障害になりました。初めは、私のことすら覚えていなくて、すごくシヨックでした。普通の生活が出来るようになるまでおおよそ一年かかりました。その間父さんは、仕事に復帰出来るように、職業センターに通っていました。中途障害者の父さんは、今までの生活も出来なくなつたことへのとまどいから、声を荒げることもありました。その声を聞きたくない私は、ゲームに夢中になりました。父さんもすごく辛そうで、大変なことは分かっているのですが、それを支える母さんは疲れきっていました。私達兄弟は、それを目にするたびに、心が苦しくなりました。県や市の相談にも行ってみました。障害者本人の相談は出来るものの、父さんは自分のことを上手く説明で

きないので、結局何も解決出来ずに終わってしまいました。苛立つ父さんを見て、自分には何が出来るのか、悩みました。目に見えて良くなることがない父さんに、現実が嫌になって、私はゲームに逃げるようになりました。ゲームをしている時だけは、何もかも忘れられました。それでも毎日が過ぎていくので、このままではいけないと思いました。そこで、お昼の用意が出来ない父さんに代わり、私がカップラーメンを作って一緒に食べたり、対戦ゲームをして父さんがさみしい思いをしないように一緒に過ごしました。日によって体調や気分が悪くなる父さんとの会話は、とても難しいですが、毎日話しかけるようになりました。何が出来なくて、何が辛いのか、徐々に父さんの障害を理解出来るようになりました。少しずつ、日常生活を送れるようになってきました。私は、今の状況をあたり前だと感じるようになりました。ですが私は、今までとは違う父さんを、今でも受け入れられません。どうしても、昔と比べてしまいます。別人になってしまった父さんは、私の父さんではありません。私の父さんは三年前にいなくなっただと思うことにしました。今の父さんを、一人の人としてつき合うことで、私は今を生きていこうと考えました。そうしなければ、私は乗り越えることが出来ないのです。これが正しい方法なのか、私にはわかりません。障害者と共に生きるのが、当たり前になった今助けてほしいと言えない時や、どうしたら良いかわからない時の逃げ場が私には必要です。家族だけでは支えきれない時もあると思います。どうしたら前向きになれるのか、正しい方法は何か、誰が知っているのでしょうか。私は父さんが死ぬまで、共に生きていきます。もう父さんに守ってもらうことはないけれど、それでも生きぬいていこうと

思います。これから先、父さんのように障害をかかえながら生きていくには、どんな支援が必要なのか、もつと周りに伝えていけるようになりたいです。「助けてください。」と言えば、「何をすればいい?」と返ってくるような社会になれば、私のように悩む人が減るのだと思います。

障害者と生きることが障害にならない時代が一日でも早く実現することを願います。